

# 留学生の日本語能力と外国語副作用との関連

○楊嘉寧・井上弥

(広島大学大学院教育学研究科)

## 問題・目的

教育の場では、よく取り入れているグループ・ディスカッションの学習形態には、他者が言ったことを理解できることと、自分の考えを論理的に組み立てて分かりやすく他者に伝えることが同時に要求されている。その場面において、母語でならば理路整然と理解することや話すことができるのに、日本語の場合にはちゃんとできない経験を持つ留学生が多い。

この現象について、Takanoら(2003)は、二重実験を用いて、外国語処理しながら思考への干渉率が母語処理しながら思考への干渉率より高いこと実証した。この干渉率の差を外国語副作用と呼ぶ。これは、母語ほどには習熟していない外国語を使用している時に思考力の低下が生じることを示唆している。ディスカッション場面とはまさに外国語の言語処理と論理的な思考が混ざっている場面であるため、そこに参加する留学生には、外国語副作用が起こっていると予想できる。また、留学生によっては外国語副作用を受けている程度が異なることも考えられる。

しかし、どのような要因が外国語副作用の高低に影響を及ぼすのかは実証的に検討されていない。副作用の概念で言及された「習熟する程度」の以外に、日本滞在期間、日本語専攻かどうかという要因も外国語副作用に影響する可能性があると考えられる。そこで本研究では、これらの要因と外国語副作用の高低の関係を検討することを目的とした。

## 方法

**参加者** 日本の大学院に在籍している中国人留学生 29 名（男性 9 名女性 20 名、日本語能力試験 N1 レベル、平均滞日月数は 26.7 ヶ月）であった。

**二重課題** Takanoら(2003)に基づき、言語課題（質問聴解）と思考課題（計算問題）を同時に遂行させた。言語課題は、母語、日本語、なしの 3 条件（それぞれ、母語条件、日本語条件、統制条件とする）があった。

**手続き** 一人の参加者に、母語条件（質問聴解の内容は母語で提示する）、日本語で行う日本語条件（質問聴解の内容は日本語で提示する）、言語課題を行わずに思考課題のみを行う統制条件を実行させた。これら 3 条件の施行順序は、無作為に被験者間でカ

ウンターバランスした。それぞれの条件において思考課題として 2 つの整数を加算する計算をさせた。

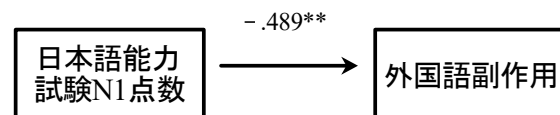
## 結果

Takano(2003)を参考に、 $I=(S-D)/S \times 100\%$ （I は干渉率、S は単独課題の統制条件での計算正答数、D は母語または日本語条件での計算正答数）を用いて、 $I_{日}$ （日本語条件での干渉率）と  $I_{中}$ （中国語条件での干渉率）を算出した。外国語副作用である  $I_{日}$  と  $I_{中}$  の差も算出した。

まず、日本語条件での干渉率が中国語条件での干渉率より有意に大きかった ( $t(28)=4.22, p<.001$ ) ため、留学生に外国語副作用が起こっていることを確認した。

次に、日本語副作用に影響を及ぼす要因を明らかにするため、日本語能力試験 N1 点数、日本に滞在月数、日本語専攻かどうかを独立変数、日本語副作用の点数を従属変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果、日本語能力試験 N1 点数のみ日本語副作用の高低に有意な負の影響を及ぼしていた ( $\beta=-.489, p<.01$ )。

( $R^2=.211$ )



\*\* $p<.01$

Figure 1 N1点数と副作用の関係

## 考察

Takanoら(2003)と同様に、本研究でも外国語副作用が生じていた。結果から、外国語副作用に影響すると考えられていた 3 要因の中では、日本語能力試験 N1 得点のみが影響しており、日本語専攻であるか否か、滞在月数の長短は、外国語副作用に影響していないことが分かった。したがって、外国語副作用の低減には、日本語能力試験 N1 得点が示すような日本語能力そのものを高めることが不可欠である。他方で、滞在期間のような日本語と接する時間が長いだけでは副作用の低減に有効とは言えないが示唆された。